

大分県JICA派遣専門家連絡会会報 第14号



●三 舟 求真人	
今年の猛暑に思う	1

●村 岡 敬 一	
ミレニアム開発目標10年目に寄せて	3

●安 東 孝 文	
「サントドミンゴの思い出」	
ー日本・ドミニカ共和国消化器疾患研究臨床プロジェクトに参加してー	5

●亀 山 哲	
大分とモンゴル・バヤンホンゴル県	9

●安 東 忠	
オヤカチふるさと創生事業	11

●松 本 俊 郎	
セルビア共和国乳がん早期発見機材整備計画準備調査に参加して	16

●メリッサ・メイヤー (Melissa Mayer)	
スポーツ振興による国際交流活動	20

●Lucky Runtuwene	
私の留学生としての生活	24

●事務局便り	27

●大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項	28

今年の猛暑に思う

三 舟 求真人

大分県JICA派遣専門家連絡会会長
qqkw4a29@themis.ocn.ne.jp



専門家連絡会の皆様、その後も御健勝のことと存じます。今年の夏は何十年ぶりの猛暑であったといわれ、数々の熱帯地の生活を研究や医療協力で経験し、自分は暑さには強いと信じていた私もさすが今年の暑さには参り、熱中症らしき病気にもやられました。我が家の庭木にも毎日のように水をやったのですが、一部は枯れてしまいました。

CO₂の過剰排出とその蓄積による地球温暖化の影響でしょうか、日本列島を囲む太平洋や日本海の海水温度も例年になく高くなり、獲れるはずの魚が不漁になったり獲れる時期が変化したとの報告、また、世界各地で早魃や大洪水、竜巻などの自然災害が頻発し、テレビや新聞をにぎわす日々が続きました。

地球温暖化という言葉をおくと私の脳裏にはまずデング熱のことが浮かんでまいります。20年以上にもなるでしょうか、だいぶ以前から、地球の各地の年間の平均気温が2度以上上昇すると、デング熱が現在は土着していない日本など温帯地域にもデング熱を効率よく媒介するネッタイシマカ（写真1）が生着するようになり、一旦デング熱が入るとそれは土着し、毎年のように流行が始まるようになるといわれているからです。そして今年は世界各地、とくに東南アジアや中南米、カリブなどの国々では各国で数万から数十万人の患者が発生しております。アメリカのフロリダ半島南部地域や台湾に

も土着性のデング熱が大流行しています。専門家の話によりますと、今年はこの猛暑と雨の降り具合がネッタイシマカの大量発生にまことに好都合だったというのです。

デング熱の死亡率は1～2%とそれほど高くないのですが、それでもこれらの国々では多くの人々が命を落としております。そして今年のデング熱の流行の特徴は、いわゆるデング熱の症状に加えて、皮下や消化管などからの出血やそれに伴うショック症状が現れ、死亡率も高くなるデング出血熱の割合が例年より格段に高いことが挙げられます。デング熱ウイルスには4つの血清型があり、過去に罹ったデング熱の型と違う型に再感染するとデング出血熱になると従来いわれてきましたが、今年は、初めての感染でも出血熱を起こすケースが増加していると報告されています。しかし、この病気に対するワクチンは現在、臨床試験中ですが実用化までには未だ時間が必要といわれております。

この会報の編集事務を長期間にわたり務めて頂いている大分大学の江下先生にお聞きすると、日本でも沖縄県の米軍基地内で、ネッタイシマカ成虫が産下した卵が見つかったことがあり、もうすでに生着している可能性も否定できないと仰言っています。もし、そうだとすると日本の最南にある九州本土への侵入も時間の問題となってくることになります。デング熱ワクチンが世界規模で実用化されるまでは何とかわ

が国への侵入は阻止したいものです。

今、ちょうど名古屋で生物多様性の種々の問題を議論する COP10 が開催されていますが、日本でも動植物を問わず熱帯などからの外来種がかなり侵入し、日本固有の種が絶滅寸前になるなどの問題もおきております。全てが地球温暖化のせいとは考えませんが、温暖化が企業や私どもが日常の活動や生活の中で排出する CO₂ が

主な原因であるとするならば、それは私どもの努力で必ず軽減でき、温暖化を緩やかにし、遅らせることができる筈と思っております。今年の夏は自分の生活様式がこの方向性に沿ったものであるか否かを改めて思い直すよい機会となりました。

(平成 22 年 10 月 25 日、記)



写真1 ネットイシマカ成虫（左：背中には複数の白線。今の日本には生息していない？）および、ヒトスジシマカ成虫（右：背中には一本の白線。日本に生息している。）

ミレニアム開発目標10年目に寄せて

村 岡 敬 一

独立行政法人国際協力機構
JICA九州国際センター所長
jicakic@jica.go.jp



皆様、こんにちは。

独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長の村岡敬一です。

本年4月に所長の任を拝命し、着任いたしました。

九州での勤務は初めてですが、21年前に当センターの設立にかかわりました。開所式の記念に植えた若木がいまや地にしっかりと根を張り、枝を大きく広げているのをみるにつけ、この間、当センターと九州各地の皆様との関係が若木の成長をなぞるように、より成熟した関係となってきていることを大変うれしく思っています。

さて、機構を取巻く国内外の環境につきましては、まず、昨年11月および本年5月に行われました行政刷新会議の事業仕分けにおいて、機構業務の効率的運営や説明責任の重要性が指摘され、現在、見直すべきところは見直し、改めるべきところは改める作業に組織を挙げて取り組んでいるところです。

同仕分けにおきまして、機構業務の意義や目的については理解をいただいたところですが、その後、本年6月には外務省より発表された「ODAのあり方に関する検討」では、国民の理解と支持のもと、引き続き戦略的効果的な途上

国支援を行う実施機関として機構の強化が打ち出されました。同検討では、「開かれた国益を増進」するために「世界の人々とともに生き、平和と繁栄をつくる」との新たな理念を示し、重点分野として①貧困削減（ミレニアム開発目標達成への貢献）②平和への投資③持続的な経済成長の後押し3つの点に絞り込み、これらの分野へ日本の「人」、「知恵」、「資金」、「技術」を結集した開発協力の方針が提示されました。また開発協力に対する国民の理解と支持の促進のために、JICAに対し多様な関係者の「結節点」としての役割の強化を求め、当センターを含む国内拠点、JICA関係者等をフル活用し、ODA広報、交流・会議のための場所の提供、シンポジウムや研修の実施等に力を入れていくよう提言しています。

一方、海外に目を向けますと、2000年9月の国連ミレニアムサミット開催を契機に「ミレニアム開発目標」が掲げられ、今年は10年目の節目の年となっています。この目標は貧困や飢餓の半減、妊産婦の健康改善や乳幼児の死亡率低下、感染症の防止など8つの項目からなり、援助国側および被援助国側の双方が2015年の目標達成に向け取り組んでいます。今年9月にニューヨークで開催されたミレニアム開発目標国連首脳会合には、約140ヶ国が参加し、達成状況の中間レビューが行われました。我が国

は菅直人首相が保健・教育分野で今後5年間に85億ドルの支援を表明し、残りの5年間、各国があらゆる手段を尽し目標達成に向け取り組んでいくこととなりました。

このように国際協力の重要性は増す一方で、JICAとしては国内の厳しい経済状況の中、より効果的効率的な事業運営を目指しています。

国内における国際協力の最前線である九州国際センターは、九州における「結節点」としての役割の強化に向けて、大分の皆様方からの理解と支持を得つつ、九州ならではの特徴ある研修事業や市民参加協力事業を推進し、開発への貢献に取り組んでいく所存ですので引き続きご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



「サントドミンゴの思い出」

—日本・ドミニカ共和国消化器疾患研究臨床プロジェクトに参加して—

安 東 孝 文

杵築中央病院 理事長・院長
dr.andoh@kc-hospital.or.jp



はじめに

日本・ドミニカ共和国消化器疾患研究臨床プロジェクトの思い出を書くにあたり、反省のない自分を改めて時間という距離をおいてプロジェクトならびに自分を見つめるチャンスとなりました。大分医科大学のすばらしいスタッフによりこのプロジェクトは支えられていたとつくづく思っております。それを構築された糸賀敬先生、三舟求真先生、寺尾英夫先生に対して、またプロジェクトに参加させていただ

いたことに対して感謝しているこのごろであります。短期、長期の2回参加させていただきました。金斗雲に乗った孫悟空のような私に対しほんとうに大きな御心を持って対応していただいた糸賀先生に感謝申し上げる次第です。糸賀先生の下で臨床医としてごくわずかな日数でありましたが、臨床ができたのが私の誇りであり、これからの道の指針であります。はじめに2枚のお写真を提示いたします。



JICA・大分医科大学が作り上げた消化器病センターでの回診風景です。

写真は糸賀先生、軍医イダルゴ(センター長)、中国系ドミニカ人ホンチョン医師、ドミニカ人医師と看護師、検査技師および栄養士と大分医科大学看護師白川貴美代さんと私であります。

はじめての着任

日本を発つ前に医局の女性から脅された。そんなところにいったらティッシュもないのよといわれた。パスポートは official passport であり、成田の税関から出国するときに、行ってらっしゃいといい、テレビなどで自衛官が行う正式な敬礼を受けた。私はびっくりして頭を下げたが、日本国を代表するということの待遇をうけるのだなと思った。機上ではスペイン語の勉強を New York に着くまでやったし、New York から Santo Domingo に着くまでスペイン語を勉強した。New York から飛行機に乗ると男性の cabin attendant ががらがらの飛行機の中で若い女性の傍に座れといい、そこに案内してくれた。今から考えても顔が赤らむが、スペイン語で座っている女性に話かけた。JICA 研修や大分でのスペイン語の練習以外でそれがはじめて使ったスペイン語だった。未知との遭遇だった。

飛行機は次第に高度を下げ、Santo Domingo の空港に着く前は長い距離、低空でヤシの木の生い茂る上を飛んだ。窓からところどころに小さな青のペンキで塗られた小屋がいくつか見えた。やはりそうだったか、ティッシュがないのか、ジャングルの中で生活するんだと思った。私はドミニカ共和国の紹介ビデオを見ていなかった。

空港に着くと現地 JICA の職員と女性の調整員が迎えに来てくれていた。VIP 室で待っていると入国手続きを終えて、VIP の出口から JICA のジープで空港をあとにした。出て行くときには、ジャングルのことは頭から消えていた。

着任直後

私の到着した日が金曜日で、専門家会が開かれた日だった。これは唯一の、そして初めて参加する日本人の集まりだった。現地 JICA の皆さんがしっかりと専門家の方々を支えていたのだと今から考えると理解した。私の左隣が大分医科大学の優秀な検査技師の和気智徳さんだった。和気さんは先に任務で着任し、私と入れ替わり日本へ帰ることになっていた。Santo Domingo での過ごし方の注意点を教えてくれた。日々の勤務は、自炊のできるアパルタホテルと日本国が援助して作った消化器病センター(セントロ)を行き来するだけだった。私が着任し、1週間ぐらいしてコショウプロジェクトのリーダーが殺害されるという事件が起こった。奥様が頸動脈を切られて、消化器疾患研究臨床プロジェクトリーダーである寺尾先生と軍医イダルゴが血管外科医を伴い現地向かい治療を行った。その後奥様は回復されたが、輸血の影響で急性肝炎となり、日本へ搬送することとなった。寺尾先生が付き添い搬送された。現地 JICA と日本大使館の対応はすばやく適切であった。寺尾先生は東京慈恵医科大学付属病院まで付き添い、そのままとんぼ返りで Santo Domingo へ帰られた。その後大分医科大学(糸賀先生、三舟先生)も相当プロジェクトとわれわれに配慮されたと思われた。

広島東洋カープが野球アカデミーというドミニカ人野球選手を育てる学校を経営しており、その取材に来ていた広島のテレビ局が消化器病センターのプロジェクトチームの一人一人を撮影してくれ、ズームイン朝で報道された。無事を家族に伝えてくれたらいい。臆病者の私はプロジェクトチームと移動する以外は着任してからセントロの勤務を終えた金曜日の夕方から、土曜日、日曜日とアパルタホテルに3ヶ月間閉じこもり一人で外出できなかった。

日本人専門家に対して JICA がイギリスより招聘した誘拐テロ防止のプロフェッショナルによる講義を行ってくれた。日常生活でどうい

点に気をつけないといけないかいろいろと教えてくれた。車を運転するとき、どのレーンを通行せよとか、信号停止のときには、どの位置に停止せよとか、アパルタホテルからセントロまで通勤するのに毎日同じ道を通ってはいけない。誘拐されたら抵抗してはいけない。出された食事はすべて食べろ等々教えられた。運転手のサルヘント（拳銃を腰に持った軍曹）と JICA の調整員を載せたジープでわれわれを毎日違うルートでセントロまで運んでくれた。

セントロ

私は着任直後よりセントロは大分医科大学を縮小した病院だと思っていた。寺尾先生の名声を聞きつけて、ドミニカ共和国全土から患者さんが集まってきていた。ある患者にいたっては朝の2時より起きてタクシーとバスを乗り継ぎ乗り継ぎして受診にこぎつけていた。

ある朝、セントロに着いてみるとセントロの屋上、玄関に、軍服を着た兵士たちが門に向けて機関銃を向けて立っていた。銃口がわれわれを向いていた。Banco Popular（銀行）の頭取が寺尾先生の超音波検査を受けに来たという。（現在、NHK-BS アメリカ大リーグの試合で Banco Popular の文字を見ることができます。）寺尾先生のご努力でセントロの名声は急速に広まっていった。

セントロには上下内視鏡が準備されていて検

査可能であった。ただファイバースコープを使用し接眼レンズから食道・胃・十二指腸の中を観察するものであった。生検ももちろんできた。その後接眼レンズに接続する teaching scope を寺尾先生が買ってこられた。これでファイバースコープを挿入時よりドミニカ人医師と観察でき説明ももっと身近なものとなった。このころ内視鏡室も非常に陽気であった。看護師たち、内視鏡検査を待っている患者たちから、アンド、バイレ（踊れ）、バイレ（踊れ）と囃し立てられファイバースコープを持ちながら看護師とともにメレンゲを踊ったことをここで告白しておきます。停電が日常茶飯事のごとく起こった。内視鏡検査中に停電し検査を中断した。患者たちは何一つ文句を言わず、黙って帰っていった。

消化器疾患研究臨床プロジェクトの初代のリーダー寺尾英夫先生から糸賀敬先生へと代わった。糸賀先生によりセントロに電子内視鏡が設置された。この電子内視鏡により同時に何人ものドミニカ人医師たちが見学でき勉強でき、習得していった。

これはドミニカ人医師ジュベールスたちと一緒に日本から準備していた器具を使用し EVL（食道静脈瘤結紮術）を行っているところです。

ドミニカ人医師たちの真剣さが伝わってくる1枚の写真だと思います。



レジデント

けたたましく電話が鳴った。夜中の2時過ぎだった。セントロからだった。アンド、出血していると叫ぶ声が聞こえた。今でも忘れない女性のレジデントからだった。

昨日の夕方運ばれてきた食道静脈瘤破裂の患者に日本製のSBチューブを入れて止血して、経過観察し翌日治療予定とした症例だった。このころ午後4時過ぎると消化器病センターは機能しなかった。止血を済ませて出血がないことを確かめて、帰宅していた。患者が動いたのだろうか、固定が緩んだのだろうか、誰かがいじったのだろうかといういろいろ浮かんできた。ほんとに出血しているのかと尋ねると、出血しているという。午前2時過ぎだ。どうする。往くぞと決意した。警察上りのアパートの門番が、こんな夜中にどうしたのかと尋ねた。このプロジェクトの創始者である糸賀先生より譲り受けたマークIIに乗り込んだ。アパートを囲んだ頑丈な重い門を押し開けてくれた。私はいけるのだろうか自分の頭の中の地図を蘇らせた。もうアパートから出てカーブを曲がっていた。ライトに照らされるいつもの町並み、いつもの道、と確かめながら通った。道路の真ん中のマンホールの蓋が、持ち去られてなくなっているところも通った。よし間違いないと確信しながら夜中の市街地を通り抜けて行った。止まったら危ないと思っていた。スピードは相当出していた。誰にも、他の車にも何一つ会わなかった。私は、消化器疾患研究臨床プロジェクトの中では臆病者で通っていた。スラム街にある消化器病センターの正面玄関につき、パッシングをした。ひげを蓄えた門番がショットガンを抱いて、私を確かめるように門の向こうから覗いた。私

はセニョールと声をかけた。私だとわかると重い門をショットガンを背中に担いで押し開けてくれた。どうしたのかと尋ねられた。患者が出血しているんだというと言番は大変だなといいながら、セントロの正面玄関を開けてくれた。2階の病棟へ駆け上がった。病室は静かだった。ほら、出血しているとレジデントが見せてくれた。ほっとした。出血はしていなかった。よかった。患者は不安そうに少し微笑んだ。SBチューブにテンションをかけた包帯も緩みはなかった。レジデントはいった。アンド、ピストルもってきたか。危ないぞと。そんなにあぶないのかと改めて思った。アパートからセントロまで車で普通40分はかかった。

帰り道を考えるといやだなと思った。しかし帰り道は出血していなかったという安堵感とともに帰ることができた。同日にEVL（食道静脈瘤結紮術）を施行した。

現在でも日本・ドミニカ共和国消化器疾患研究臨床プロジェクトが作り上げたCentro de Gastroenterologia（消化器病センター）がしっかりと機能しており、ともに働いていたドミニカ人医師たちが現在も働いており、大活躍していることを寺尾先生よりお聞きしうれしく思っているこのごろです。国際医療に造詣の深い先生がたくさんいる大分医科大学だからこそプロジェクトは成功したと思っております。

大分医科大学は大分大学と統合し新しい大分大学となっています。だからこそこの新しい大分大学が、その経験のある大学として国際医療協力を継続していただきたいと強く希望しています。

2010/10/29 脱稿

大分とモンゴル・バヤンホンゴル県

亀 山 哲

元大分モンゴル親善協会 会長
Kameyama@kenmin-kyosaikai.jp



大分モンゴル親善協会は、1986年10月に当時社会党参議院議員佐藤三吾氏の要請により法人会員50社・個人会員144名で設立されました。

佐藤三吾氏は1983年参議院議員としてウランバートルを初訪問。その際にモンゴルの若い政治家達と交流し、その情熱にほだされ帰国後、政治家同士・官と官の結びつきを国会内で行いましたが、政治家は落選したら官僚は転勤すれば、交流が途切れるとの考えから、民間交流の必要性を感じて故郷の大分に親善協会を発足させました。

親善協会の事業の一つとして、1987年夏から毎年訪問団を派遣し、協会が解散した2006年まで20回、延べ315人がモンゴルを訪問しました。

1994年には、初代会長・橋本義生氏の遺言で、ゴビ砂漠に小さなオボを造り分骨・埋葬しました。この話を聞いた、当時の駐日特命全権大使フレルバートル氏がバカバンディ大統領に相談し、大統領の肝いりで、費用は全額モンゴル負担で「大分モンゴル友好の碑」を建立していただきました。

フレルバートル氏は、協会設立総会にも当時一等書記官として出席され、以後いろいろとお世話いただきました。特に、碑石建立に当っては現場で建立作業を監督・建立セレモニーを采配いただき、その姿に大分からの参加者が感激

して、何らかのお役に立ちたい気持ちから、彼の故郷バヤンホンゴル県との交流が始まりました。

1999年からの交流では、5年間で8名の研修生の受入、研修生が帰国して実施している農業普及の手助け、地熱開発のための温泉調査、一村一品運動の導入、ゾド募金・学校建設資金寄附等々を行いましたし、2006年10月の親善協会解散以後も農業普及や一村一品運動の手助けの交流はまだ続いています。

学校建設資金の寄附では、2001年大分県立蒲江高等学校が少子化と過疎のため廃校になることが決定したことから、地球のどこかに校名を残して卒業生の思い出にしたいとの発案で、バヤンホンゴル県シャルガルジュート学校に300万円を寄附「かまえ校舎」を増築しました。

また、大分県労働者総合生協は2003年、創立20周年記念事業の一環として、バヤンホンゴル県に学校建設資金500万円を寄附、途中建築トラブルがあり工期が遅れましたが2006年4月に「総合生協学校」として開校され、民族芸能や日本文化を教える特殊学校として発展しています。

当初は4年制でスタートし、以後毎年新入生を受入れ最終的に11年制の学校にする予定のため、年々生徒数も増え手狭になったため、総合生協グループの(財)県民共済会の解散・合併にともなう寄附金500万円に、外務省や地元の応

援をいただいて 2010 年 3 月起工・9 月竣工で
新校舎の増築を行いました。



大分モンゴル友好の碑



総合生協学校

オヤカチふるさと創生事業

安 東 忠

特定非営利活動法人
大分一村一品国際交流推進協会副理事長
info@ovop.jp



大分生まれの「一村一品運動」は、地域づくりのモデルとして世界各地で高い評価を得て、アジア、アフリカ等でその導入が試みられている。アンデス地域においては、ペルー、エクアドル、コロンビアが特に熱心で、昨年のセミナー開催にはじまり、今年から、具体的に運動が動き始めている。

今年2月訪問した前記3国の中で、「オヤカチふるさと創生」運動については、現地を見学した関係者一同、これこそアンデス版「一村一品運動」の最高のモデルだとその理念と活動に脱帽した。

オヤカチは、エクアドルの首都キトから120キロ、また、アマゾン川のエクアドル領内の源流に位置する原住民130人の小さな村である。長い間、狩猟と原生林の伐採料を生活の糧としていた。

森林開発業者であるヨーロッパ系エクアドル人アルフレッド氏は、これまでアマゾンの原生林を、伐採し輸出していたが、オヤカチが森林を始め自然環境のあまりにもすばらしいことに感銘し、その森林伐採の禁止と保護、さらに生活の持続的な発展を図るため、集落をさらに奥地約20キロの地点に集団移転するよう村人（先住民）を説得した。また、新たな生活の場としてグリーンツーリズムを基本にした新オヤカチ村創生事業を個人的に支援・指導した。

- ・水源を活用したますの養殖（写真1）
- ・旅館・食堂・温泉プールの運営（写真2）
- ・焼きばたの名残である枯れ大木を活用した木工品の製作
- ・林間放牧による牛の放牧（写真3）
- ・マイクロファイナンス（基金1万ドル 預金高7万ドル）の設立

事業の開始当初は、アルフレッド氏の、資金援助と指導により進められたが5年を経過した今日では、事業もすっかり軌道に乗り、住民の自主活動に任せているとのことであった。このほど村独自の金融機関も政府により正式に認可されたとのことであった。

当日は、アルフレッド氏自らの案内で村内を回り、同氏の主唱する「女性も老いも若も 障害を持つ人々も 村民一人一人が主役である村づくり」を実感することができた（写真4）。



Piscicultura

La actividad piscícola se inició en el año 1997. En ella participan un 20% de las familias. Esta no fue una práctica tradicional en la comunidad.

Debido a los recursos de agua disponibles en la zona, varias familias han invertido en piscinas y están sembrando alevines. Esta actividad provee alimentación e ingresos a las familias. Los comuneros dedicados a esta actividad, están agremiados en la Asociación de Piscicultores Oyacachi. Bajo la administración del Cabildo existen 6 piscinas de producción y 4 piscinas de alevines para la crianza de truchas. Manejan dos variedades de trucha, la nacional y la mejorada. La producción se comercializa localmente, en la población de Cayambe y en Quito.



WWW.OYACACHI.ORG.EC

写真1 マスの養殖と釣堀（オヤカチのパンフレットより）



Turismo

Oyacachi se abrió al turismo con la construcción del Complejo Termal en 1999. Existe, sin embargo una amplia oferta en valores culturales (vestimenta, tradiciones, restos arqueológicos), escénicos (pasaje, ríos, cascadas), de biodiversidad (avifauna, mastofauna, flora) y de aventura.

Se pueden observar las ruinas de lo que fue el pueblo viejo de Maucallacta, localizadas a 2 Km. del actual pueblo. Existen evidencias de antiguos cultivos en terrazas. La ruta Oyacachi-Chaco sirvió para el intercambio comercial entre la sierra y la amazonía.



Las lagunas constituyen un importante recurso paisajístico. La ruta Oyacachi – Chaco constituye un interesante y atractivo espacio para el turismo de aventura. Cuenta con 3 piscinas de aguas termales y minerales.

Alrededor del 20% de las familias de la comunidad participan de esta actividad. Los visitantes, provenientes principalmente de Cangahua y Cayambe, focalizan su interés en las termas.



WWW.OYACACHI.ORG.EC

Jhon y Alejandra Jarama Pichón

写真2 温泉を主体にグリーンツーリズムが盛ん（オヤカチのパンフレットより）



Pecuaria

La ganadería es una actividad económica en la que participan cerca del 95% de las familias. La venta de leche es la principal fuente de ingresos financieros en la comunidad. Además existen cuatro queseras que producen 300 quesos diarios que los comercializan en Cayambe y Quito.

El páramo constituye una zona de pastoreo a la cual tienen acceso todos los comuneros. El manejo del ganado en este ecosistema es extensivo. En esta lugar, respetando las zonas productoras de agua, pastan las vacas lecheras fuera de las épocas de lactancia, los toretes destetados, las vaconas y los toros.

En el poblado existen áreas con pastizales, aunque escasas. En la parte baja del poblado se mantienen pastos con relictos de bosque o mezclados con bosque nativo formando sistemas silvo-pastoriles. En estas unidades se ubican las vacas en producción de leche.



写真3 林間放牧による乳牛の飼育（オヤカチのパフレットより）



写真4 エクアドル国のオカチ村のシンボル（トーテム）を作成した精神障害者たちと制作指導者（右端は筆者）

